

「偏見 ～殴られるより痛い言葉～」

Karolina Płoszaj

ヤギェロン大学日本学科 4年生

肌の色や国籍や性で人々を判断してはいけないということは誰もが知っています。では仕事や髪の色で人を判断してもいいですか？名前さえも分からない人を判断してもいいですか？

ある日、合気道をやっている人たちと一緒にビールを飲みに行きました。私は始めたばかりだったので、メンバーと自己紹介することになりました。みんな、一人ずつ簡単に何をやっているかを話しました。大学の先生、哲学の大学生、市役所のPR係、建築家、会社員など職業は本当にさまざまで、「みんな、すごいなあ」と思いました。ついにわたしの番が来ました。その時、私は卒業したばかりの歯医者でした。私が自己紹介すると、そばに座っている男の人は笑顔で「じゃあなたはサディストだね？」と私に聞きました。私は聞き間違えたと思って「どういう意味？」と彼に聞くと、「人を痛がらせる仕事だから、苦痛を与えることが好きなのかなと思って」と説明されました。私は大きなショックを受けました。どうして私は全く知らない人にそんなひどいことを言われなければならなかったのですか？自分なりに人のためになっていると信じて歯医者の仕事をしていました。それを「サディスト」とは…。胸がすっごくすっごく痛かったです。泣きたいくらい痛かったです。今も思い出すと痛いのです。もちろんそんな深い考えのない言葉は気にしなくてもいいかもしれませんが、それにしても、そんな言葉を聞くと心が痛いのです。

言葉は殴るより恐ろしい武器です。パンチならよけたり、ブロックしたりできます。しかし、言葉はいきなり弾丸のように人の心を傷つけるから、自分を守ることができません。

職業だけではなく、様々な偏見が毎日のように続いています。ポーランドでは「金髪の女性はバカだ」とか「赤毛の人はうそつき」とかといわれています。日本では「金髪の若者はふまじめだ」と思われているそうです。髪の色は本当に人格にそんな影響を与えますか。

表面的なことだけで安易に人を判断するべきではありません。相手のことをよく知った上で自分の目で評価をするべきだと思います。みんなは一人一人違う人間だから、前もって作られた考えは大体間違っています。偏見を持つとその人の本当の姿が見えなくなってしまうのです。

みなさん、このスピーチを通じて、私に対する印象は変わりましたか。怒りっぽい人だと思った人がいるかもしれませんね？でも、少なくとも、サディストではないと思いませんか？